

十三夜

樋口一葉

青空文庫

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと兩親に出迎はれつる物を、今宵は辻より飛のりの車さへ歸して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの高聲、いはゞ私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の欲さへ渴かねば此上に望みもなし、やれ、有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母様、あゝ何も御存じなしに彼のやうに喜んでお出遊ばす物を、何の顔さげて離縁状もらふて下されと言はれた物が、叱かられるは必定、太郎と言ふ子もある身にて置いて驅け出して來るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせまする事つらや、寧ろ話さずに戻ろうか、戻れば太郎の母と言はれて何時々までも原田の奥様、御兩親に奏任の賀がある身と自慢させ、私さへ身を節儉れば時たまはお口に合ふ物お小遣ひも差あげられるに、思ふまゝを通して離縁とならば太郎には繼母の憂き目を見せ、御兩親には今までの自慢の鼻にはかに低くさせまして、人の思はく、弟の行

末、あゝ此身一つの心から出世の眞も止めずはならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、彼の鬼の、鬼の良人のもとへ、ゑゝ厭や厭やと身をふるはず途端、よろゝとして思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の聲道ゆく悪太郎の悪戯とまがへてなるべし。

外なるはおほ々と笑ふて、お父様私で御座んすといかにも可愛き聲、や、誰れだ、誰れであつたと障子を引明て、ほうお關か、何だな其様な處に立つて居て、何うして又此おそくに申かけて來た、車もなし、女中も連れずか、やれゝま早く中へ這入れ、さあ這入れ、何うも不意に驚かされたやうでまごゝするわな、格子は閉めずとも宜い私しが閉める、兎も角も奥が好い、ずつとお月様のさす方へ、さ、蒲團へ乗れ、蒲團へ、何うも疊が汚ないので大屋に言つては置いたが職人の都合があると申ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬから夫れを敷ひて呉れ、やれゝ何うして此遅くに出て來たお宅では皆お變りもなしかと例に替らずもてはやさるれば、針の席にのる様にて奥さま扱かひ情なくじつと涙を呑込で、はい誰れも時候の障りも御座りませぬ、私は申譯のな

い御無沙汰して居りましたが貴君もお母様も御機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いや最う私は噓一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道と言ふ奴を始めるがの、夫れも蒲團か

ぶつて半日も居ればけろくとする病だから子細はなしさと元氣よく何々と笑ふに、
 亥之さんが見えませぬが今晚は何處へか参りましたか、彼の子も替らず勉強で御座
 んすかと問へば、母親はほたくとして茶を進めながら、亥之は今しがた夜學に出て行
 ました、あれもお前お蔭さまで此間は昇給させて頂いたし、課長様が可愛が
 ったので下さるので何れ位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁引が有るか
 らだとして宅では毎日いい暮して居ます、お前に如才は有るまいけれど此後とも原田さ
 んの御機嫌の好いやうに、亥之は彼の通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない
 御挨拶よりほか出来まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通
 じるやう、亥之が行末をも頼み申て置てお呉れ、ほんに替り目で陽氣が悪いけれど太
 郎さんは何時も悪戯をして居ますか、何故に今夜は連れてお出でない、お祖父さんも戀し
 がつてお出なされた物と言はれて、又今更にうら悲しく、連れて来やうと思ひました
 けれど彼の子は宵までひで最う疾うに寝ましたから其まゝ置いて参りました、本當に悪
 戯ばかりつりましたして聞わけとは少しもなく、外へ出れば跡を追ひますし、家内に
 居れば私の傍ばかり覗ふて、ほんに手が懸つて成ませぬ、何故彼様で御座りませう
 と言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るやうに、思ひ切つて置いては來たれど今頃は

めを覺して母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、煎餅やおこしの哆しも利かで、皆々手を引いて鬼に喰はすと威かしてゞも居やう、あゝ可愛さうな事と聲たてゞも泣きたきを、さしも兩親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こんくとして涙を襦袢の袖にかくしぬ。

今宵は舊曆の十三夜、舊弊なれどお月見の眞似事に團子をこしらへてお月様に備へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極りを悪るがつて其様な物はお止なされと言ふし、十五夜にあげなだから片月見に成つても悪るし、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上る事が出来なんだに、今夜來て呉れるとは夢の様な、ほんに心が届いたのであらう、自宅で甘い物はいくらも喰べやうけれど親のこしらいたは又別物、奥様氣を取すて、今夜は昔のお關になつて、見得を構はず豆なり粟なり氣に入つたを喰べて見せてお呉れ、いつでも父様と噂すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位の宜い方々、や御身分のある奥様がたとの御交際もして、兎も角も原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上に立つものは夫れ丈に苦勞が多く、里方が此様な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心

懸くろがけもしなければ成なるまじ、夫それを種さま々に思おもふて見みると父ととさんだどて私わたしだどて孫まごなり子こ

 なるの顔かほの見みたいは當あたり然まへなれど、餘あんまりうるさく出で入りをしてはと控ひかへられて、ほんに

 御門ごもんの前まへを通とほる事ことはありとも木綿もめん着物きものに毛け縷じゆす子の洋傘かふもりさした時ときには見みすくお二階かいですだれの簾れん

 を見みながら、吁あゝお關せきは何なにをして居ゐる事ことかと思おもひやるばかり行過ゆきすぎて仕舞しまひまする、實家じつかでも

 少すこし何なんとか成なつて居ゐたならばお前まへの肩かた身みも廣ひろからうし、同おなじくでも少すこしは息いきのつけやう物もの

 を、何なにを云いふにも此この通とほり、お月見つきみの團子だんじをあげやうにも重箱おちゆうからしてお恥はづかしいでは

 無なからうか、ほんにお前まへの心こゝろづか遣おもひが思おもはれると嬉うれしき中なかにも思おもふまゝの通路つうろが叶かなはね

 ば、愚痴ぐちの一いつつかみ賤いやしき身み分ぶんを情なさけなげに言いはれて、本當ほんたうに私わたしは親おや不ふ孝かうだと思おもひま

 する、それは成程なるほど和やはらかひ衣類きものきて手車てぐるまに乘のりあるく時ときは立派りつぱらしくも見みえませうけ

 れど、父ととさんや母かゝさんに斯かうして上あやうと思おもふ事ことも出で来きず、いはゞ自じ分ぶんの皮かは一ひと重とゑ、寧いつそ

 賃ちん仕事じこしてもお傍そばで暮くらした方ほうが餘よつぽど快こゝろよう御座ございますと言いひ出だすに、馬鹿ばか、馬鹿ばか、

 其そのやうな事ことを假かりにも言いふてはならぬ、嫁よめに行いつた身みが實家さとの親おやの貢みつぎをするなど、思おもひも寄よ

 らぬこと、家うちに居ゐる時ときは齋さい藤とうの娘むすめ、嫁入よめいつては原田はらだの奥方おくがたではないか、勇いさむさんの氣きに

 入いる様やうにして家いへの内うちを納おさめてさへ行ゆけば何なんの子細しさいは無ない、骨ほねが折をれるからとて夫それ丈だけの運うん

 のある身みならば堪たへられぬ事ことは無ない筈はず、女をんななど、言いふ者ものは何どうも愚痴ぐちで、お袋ふくろなどが詰つまら

ぬ事を言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調製たものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうぞと父親の滑稽を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴をなしぬ。嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩行して來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほど燦かならず、稀に逢ひたる嬉しさに左のみは心も付かざりしが、賀よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし處のあるは何か子細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、これやモウ程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならば最も歸らねば成るまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様私は御願ひがあつて出たので御座ります、何うぞ御遊しと屹となつて疊に手を突く時、はじめて一トしづく幾層の憂きを洩しそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、勇が許して參つたのではなく、彼の子を寐かして、太郎を寐かしてつけて、最早あの顔を見ぬ決心で出て參りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承諾せぬほどの彼の子を、欺して寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て參

りました、御父様、御母様、察して下さりませ私は今日まで遂ひに原田の身に就いて御耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、何うぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、私はいつしやうひとり内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人置いて下さりませとわつと聲たてるを噛しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出ると哀れなり。

夫れは何ういふ子細でと父も母も詰寄つて問かゝるに今までは黙つて居ましたれど私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大底が御解りに成ませう、物言ふは用事のある時慳貪に申つけられるばかり、朝起まして機嫌をきけば不圖脇を向ひて庭の草花を態とらしき褒め詞、是にも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々、と私が身の不器用不作法を御並へなされ、夫れはまだく辛棒もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑みなさる、それは素より華族女学校の椅子にかゝつて育つた物ではないに相違なく、御同僚の奥様がたの様に

花のお茶の、歌の畫のと習ひ立てた事もなければ其御話しの御相手は出来ませぬけれど、出来ずは人知れず習はせて下さつても濟むべき筈、何も表向き實家の悪るいを風聽なされて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと言ふ物は丸で御人が變りまして、思ひ出しても恐ろしい御座ります、私にはくら暗の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か串談に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私に御飽きなされたので此様もしたら出てゆくか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苦めて苦め抜くので御座りましたよ、御父様も御母様も私の性分は御存じ、よしや良人が藝者狂ひなさらうとも、圍い者して御置きなさらうとも其様な事に愷氣する私でもなく、侍婢どもから其様な噂も聞えまするけれど彼れほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事としては一から十まで面白くなく覺しめし、箸の上げ下しに家の内の楽しくないは妻が仕方が悪るいからだと仰しやる、夫れも何ういふ事が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さる様ならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴

とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰し
 やる斗、ほんに良人といふではなく彼の御方は鬼で御座りまする、御自分の口から出てゆ
 けとは仰しやりませぬけれど私が此様な意久地なしで太郎の可愛さに気が引かれ、何う
 でも御詞に異背せず唯々々と御小言を聞いて居りますれば、張も意氣地もない愚うたら
 の奴、それからして氣に入らぬと仰しやりまする、左うかと言つて少しなりとも私の言
 條を立て、負けぬ氣に御返事をしましたら夫を取てに出てゆけと言はれるは必定、私は
 御母様出て来るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとて夢
 さら残りをしいとは思ひませぬけれど、何にも知らぬ彼の太郎が、片親に成るかと思ひ
 ますると意地もなく我慢もなく、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日ま
 でも物言はず辛棒して居りました、御父様、御母様、私は不運で御座りますとて口
 や惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を談れば兩親は顔を見合せて、さては其様の憂
 き中かと呆れて暫時いふ言もなし。
 母親は子に甘きならび、聞く毎々、に身にしてみて口惜しく、父様は何と思し召すか知
 らぬが元來此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの學校が何
 うしたのと宜くも宜くも勝手な事が言はれた物、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしか

に日まで覺えて居る、阿關が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝の事であつた、舊の猿樂町の彼の家の前で御隣の小娘と追羽根して、彼の娘の突いた白い羽根が通り掛つた原田さんの車の中へ落たとつて、夫れをば阿關が貰ひに行きしに、其時はじめて見たとか言つて人橋かけてやいゝと貰ひたがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んで置ませず、支度とても唯今の有様で御座いますからとて幾度斷つたか知れはせぬけれど、何も舅姑のやかましいが有るでは無し、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引取つてからでも充分させられるから其心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからと夫は夫は火のつく様に催促して、此方から強請た譯ではなければ支度まで先方で調べて謂はゞ御前は戀女房、私や父様が遠慮して左のみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れてゞは無い、これが妾手かけに出したのではなし正當にも百まんだら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入しても差つかへは無いけれど、彼方が立派にやつて居るに、此方が此通りつまらぬ活計をして居れば、御前の縁にすがつて聲の助力を受けもするかと他人様の處思が口惜しく、瘦せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に盡して、平常は逢いたい娘の顔も見ずに居ます、夫れを

ば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出来るの出来ぬ
 のと宜く其様な口が利けた物、黙つて居ては際限もなく募つて夫れは夫れは癖に成つて
 仕舞ひます、第一は婢女どもの手前奥様の威光が削げて、未には御前の言ふ事を聞く
 ものも者もなく、太郎を仕立てるにも母様を馬鹿にする氣になられたら何とします、言ふだけ
 の事は屹度言ふて、それが悪いと小言をいふたら何の私にも家が有ますと出て来るが
 宜からうでは無いか、實に馬鹿々々しいとつては夫れほどの事を今日が日まで黙つて居る
 といふ事が有ります物か、餘り御前が温順し過るから我儘がつのられたのである、聞いた
 計でも腹が立つ、もうく退けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母も
 ある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあればその様な火の中にじつとして居るには及ばぬ
 こと、なあ父様一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましたよと母は猛つて前後
 もかへり見ず。

父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢて有けるが、あゝ御袋、無茶の事を言ふてはなら
 ぬ、我しさへ始めて聞いて何うした物かと思案にくれる、阿關の事なれば並大底で此様
 な事を言ひ出しさうにもなく、よくく愁らさに出て來たと見えるが、して今夜は聳どの
 は不在か、何か改たまつての事件でもあつてか、いよく離縁するでも言はれて來たの

かと落ついて問ふに、良人は一昨日より家へとは歸られませぬ、五日六日と家を明ける
 は平常の事、左のみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際に召物の揃へかたが悪いとて如
 何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで擲きつけて、御自身洋服にめしかへて、
 呀、私位不仕合の人間はあるまい、御前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出
 て御出で遊しました、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、稀
 々言はれるは此様な情ない詞をかけられて、夫れでも原田の妻と言はれたいか、太郎
 の母で候と顔おし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛棒がわかりませぬ、もうくも
 う私は良人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔しと思へば夫れまで、あの頑是ない太郎の寝顔
 を眺めながら置いて來るほどの心になりましたからは、最う何うでも勇の傍に居る事は出
 來ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私の様な不運の母の手で育つより繼
 母御なり御手かけなり氣に適ふた人に育て、貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々
 あの子の爲にも成ませう、私はもう今宵かぎり何うしても歸る事は致しませぬとて、斷つ
 ても斷てぬ子の可憐さに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。
 父は歎息して、無理は無い、居愁らくもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿關の
 顔を眺めしが、大丸鬚に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘な

がらもいつしか調ふ奥様風、これをば結び髪に結ひかへさせて綿銘仙の半天に纏が
 けの水仕事さする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一端の怒り
 に百年の運を取はずして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘に戻
 らば、泣くとも笑ふとも再度原田太郎が母とは呼ばるゝ事成るべきにもあらず、良人に
 みれん、未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくは離れていよく物を思ふべく、今の苦勞を
 戀しがる心も出づべし、斯く形よく生れたる身の不幸、不相應の縁につながれて幾
 らの苦勞をさする事と哀れさの増れども、いや阿闍梨言ふと父が無慈悲で汲取つて呉れ
 ぬのと思ふか知らぬが決して御前を叱るではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふ
 て、此方は眞から盡す氣でも取りやうに寄つては面白くなく見える事もあらう、勇さん
 だからとて彼の通り物の道理を心得た、利發の人ではあり随分學者でもある、無茶
 苦茶にいちぢめ立てる譯ではあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕家など、言はれるは極め
 て恐ろしい我まゝ物、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内へ歸つ
 て當りちらされる、的に成つては随分つらい事もあらう、なれども彼れほどの良人を持
 つ身のつとめ、區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉るのは格が違ふ、随
 がつてやかましくもあらう六づかしくもあるう夫を機嫌の好い様にとゝのへて行くが妻の

役、表面には見えねど世間の奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有
 るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何の是れが世の勤めなり、殊には是れほど身がらの
 相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口廣い事は言へど亥之が昨今
 の月給に有ついたも必竟は原田さんの口入れではなからうか、七光どころか十
 光もして間接ながらの恩を着ぬとは言はれぬに愁からうとも一つは親の爲弟の爲、太
 郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事は
 あるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齋藤の娘、一度縁が
 切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣き
 に泣け、なあ關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に納めて、知らぬ顔に今夜は
 歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんととも親も察する弟
 も察する、涙は各自に分て泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿關はわつと泣
 いて夫れでは離縁をといふたも我まゝで御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬ
 様にならば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなる物で
 御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣にならば三方四方波風たゞず、兎もあれ彼の子も兩
 親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで嫌やな事を御聞か

せ申まをしました、今宵こよひ限り關せきはなくなつて魂たま一つが彼あの子この身みを守るまものと思おもひますれば良人おととのつらく當あたる位くら百年ねんも辛しん棒ぼう出來できさうな事こと、よく御言おことば葉はも合點がてんが行ゆきました、もう此こん樣なな事ことは御聞ごきかせ申まをせぬほどに心しん配ぱいをして下くださりますなどて拭ぬぐふあとから又また涙なみだ、母親は、おやは聲こゑたて、何なんといふ此この娘こは不ふ仕し合あと又一またしきり大泣おほなきの雨あめ、くもらぬ月つきも折をりから淋さびしくて、うしろの土手どての自然しぜん生なを弟おとの亥の之のが折をつて來きて、瓶びんにさしたる薄すくの穂ほの招まねく手振てぶりも哀あはれる夜よなり。

實家じつかは上野うへのの新坂しんざ下した、駿河臺するがだいへの路みちなれば茂しげれる森もりの木このした暗やみ佐わびしけれど、今宵こよひは月つきもさやかなり、廣小路ひろこうちへ出いづれば晝ひるも同どう樣やう、雇やとひつけの車くるま宿まやどとて無なき家いへなれば路みちゆく車くるまを窓まどから呼よんで、合點がてんが行いつたら兎とも角かくも歸かへれ、主人あるじの留守るすに斷ことわりなしの外ぐわい出いしゆつ、これを咎とがめられるとも申まを譯わけの詞ことばは有あるまじ、少すこし時刻じこくは遅おくれたれど車くるまならば遂つひ一つト飛とび、話はなしは重かさねて聞ききに行ゆかう、先まづ今夜こんやは歸かへつて呉くれとて手てを取とつて引ひき出すやうなるも事ことあら立だての親おやの慈悲じひ、阿關おせきはこれまでの身みと覺悟かくごしてお父とつさん樣つかさん、お母はは樣さん、今夜こんやの事ことはこれ限り、歸かへりますから私わたしは原田はらだの妻つまなり、良人おととを誹そしるは濟すみませぬほどに最もう何なにも言いひませぬ、關せきは立派りつぱな良人おととを持つたので弟おとの爲ためにも好いい片腕かたうで、あゝ安あん心しんなど喜よろこんで居ゐて下くだされば私わたしは何なにも思おもふ事ことは御座ござんせぬ、決けつして決けつして不ふ了りやう簡けんなど出だすやうな事ことはし

ませぬほどに夫れも案じて下さりませぬ、私の身體は今夜をはじめに勇のものだと思ひまして、彼の人の思うまゝに何となりして貰ひましょ、夫では最う私は戻ります、亥之さんが歸つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、此次には笑ふて參りますとて是非なさうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出てするが、駿河臺まで何程でゆくと門なる車夫に聲をかくるを、あ、お母様それは私がやります、有がたう御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くゞれば顔に袖、涙をかくして乗り移る哀れさ、家には父が咳拂ひの是れもうるめる聲成し。

下

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえ／＼に物がなしき上野へ入りてよりまだ一町もやう／＼と思ふに、いかにしたるか車夫はびつたりと轅を止めて、誠に申かねましたが私はこれで御免を願ひます、代は入りませぬからお下りなすつと突然にいはれて、思ひもかけぬ事なれば阿關は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり増しは上げやうほどに骨を折つてお呉れ、こんな淋しい處

では代りの車も有るまいではないか、それはお前人 困らせといふ物、愚圖らずに行つて
 お呉れと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが欲しいと言ふのでは有ませぬ、私からお
 願ひです何うぞお下りなすつて、最う引くのが厭やに成つたので御座りますと言ふに、夫
 ではお前加※でも悪るいか、まあ何うしたと言ふ譯、此處まで挽いて來て厭やに成つたで
 は濟むまいがねと聲に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もう何うでも厭やに成
 つたのですからとて 提 燈を持しまゝ不圖脇へのがれて、お前は我まゝの車夫さんだね、
 夫ならば約定の處までとは言ひませぬ、代りのある處まで行つて呉れ、ば夫でよし、代は
 やるほどに何處か 處らまで、切めて廣小路までは行つてお呉れと優しい聲にすかす様
 にいへば、成るほど若いお方ではあり此淋しい處へおろされては定めしお困りなさりませ
 う、これは私が悪う御座りました、ではお乗せ申ませう、お供を致しませう、嗚お驚きな
 さりましたらうとて悪者らしくもなく 提 燈を持かゆるに、お關もはじめて胸をなで、
 心 丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の瘦せぎす、あ、月に背けたあ
 の顔が誰れやらで有つた、誰れやらに似て居ると人の名も咽 元まで轉がりながら、もし
 やお前さんはと我知らず聲をかけるに、ゑ、と驚いて振あふぐ男、あれお前さんは彼のお
 方では無いか、私をよもお忘れはなさるまいと車より凜るやうに下りてつく／＼と打

まもれば、貴嬢は齋藤の阿關さん、面目も無い此様な姿で、背後に目が無ければ何の氣もつかずに居ました、夫れでも音聲にも心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿關は頭の方より爪先まで眺めていゝ／＼私だとして往來で行逢ふた位ではよもや貴君と氣は付きますまい、唯た今の先までも知らぬ他人の車夫さんとのみ思ふて居ましたに御存じないは當然、勿體ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まあ何時から此様な業して、よく其か弱い身に障りもしませぬか、伯母さんが田舎へ引取られてお出なされて、小川町のお店をお廢めなされたといふ噂は他處ながら聞いても居ましたれど、私も昔しの身でなければ種々と障る事があつてな、お尋ね申すは更なること手紙あげる事も成ませんかつた、今は何處に家を持つて、お内儀さんも御健勝か、小兒のも出來てか、今も私は折ふし小川町の勸工場見物に行まする度々、舊のお店がそつくり其儘同じ烟草店の能登やといふに成つて居まするを、何時通つても覗かれて、あゝ高坂の録さんが子供であつたころ、學校の行返りに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしく吸立てた物なれど、今は何處に何をして、氣の優しい方なれば此様な六づかしい世に何のやうの世渡りしてお出なうるか、夫れも心にかゝりまして、實家へ行く度に御様子をもし知つても居るかと思ひては見ま

するけれど、猿樂町を離れたのは今で五年の前、根つからお便りを聞く縁がなく、何ん
 なにお懐しう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手
 拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家と言ふ物も御座りませぬ、寐處は淺草
 町の安宿、村田といふが二階に轉がつて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで挽く
 事もありませんし、厭やと思へば日がな一日ごろくとして烟のやうに暮して居まする、
 貴嬢は相變らずの美しくさ、奥様にお成りなされたと聞いた時から夫でも一度は拜む
 事が出来るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやうに願ふて居ました、
 今日までは入用のない命と捨て物に取あつかふて居ましたけれど命があればこそその御
 對面、あゝ宜く私を高坂の録之助と覺えて居て下さりました、辱なう御座りますと
 下を向くに、阿關はさめ／＼として誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな。
 してお内儀さんはと阿關の間へば、御存じで御座りましよ筋向ふの杉田やが娘、色が白
 いとか恰好が何うだとか言ふて世間の人は暗雲に褒めたてた女で御座ります、私が如
 何にも放蕩をつくして家へとは寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰は
 ぬからだと親類の中の解らずやが勘違ひして、彼れならばと母親が眼鏡にかけ、是
 非もらへ、やれ貰へと無茶苦茶に進めたてる五月蠅さ、何うなりと成れ、成れ、勝手に成

れとて彼れを家へ迎へたは丁度貴嬢が御懷妊だと聞きました時分の事、一年目には私が處にもお目出たうを他人からは言はれて、犬張子や風車を並べたてる様に成りましたれど、何のそんな事で私が放蕩のやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たとへ小町と西施と手を引いて來て、衣通姫が舞ひを舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て發心が出來ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したまゝ音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、其子も昨年の暮チプスに懸つて死んださうに聞きました、女はませな物ではあり、死ぬ際には定めし父様とか何とか言ふたので御座りましょう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我まゝの不調法、さ、お乗りなされ、お供をしまする、嘸不意でお驚きなさりましたらう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が楽しみに轆棒をにぎつて、何が望みに牛馬の眞似をする、錢

を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭やで、お客
 様を乗せやうが空車の時だらうが嫌やとなると用捨なく嫌やに成まする、呆れはて
 る我まゝ男、愛想が盡きるでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますと進めら
 れて、あれ知らぬ中は仕方もなし、知つて其車に乗れます物か、夫れでも此様な淋しい處
 を一人ゆくは心細いほどに、廣小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しなが
 ら行ませうとてお關は小褻少し引あげて、ぬり下駄のおと是れも淋しげなり。
 昔の友といふ中にもこれは忘れられぬ由縁のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋
 の一人息子、今は此様に色も黒く見られぬ男になつては居れども、世にある頃の唐棧
 ぞろひに小氣の利いた前だれがけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうに
 も無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さて
 もくの替り様、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息
 子は丸で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、崇りでもあるか、よもや只事では無
 いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺ましい身の有様、木賃泊りに居なさん
 すやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二年より十七まで明暮れ
 顔を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ座つて、新聞見ながら商ひするのと思ふても居

たれど、量らぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入られやう、烟草の録さんにはと思へど夫れはほんの子供ごゝろ、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほどは此人も思ふて、夫れ故の身の破滅かも知れぬ物を、我が此様な丸鬚などに、取済したる様な姿をいかばかり面にく、思はれるであらう、夢さらさうした樂らしい身ではなけれども阿關は振かへつて録之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿關に向つて左のみは嬉しき様子も見えざりき。

廣小路を出れば車もあり、阿關は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失禮なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私は御別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬ様に、伯母さんをも早く安心させておあげなさりまし、蔭ながら私も祈ります、何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります處を見せて下され、左様ならばと挨拶すれば録之助は紙づゝ

みを頂いて、お辭儀申す筈なれど貴嬢のお手より下されたのなれば、あり難く頂戴し
 て思ひ出にしまする、お別れ申すが惜しいと言つても是れが夢ならば仕方のない事、さ、
 お出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空車引いてうしろ向く、
 其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力ななささうの塗り下駄のおと、村田
 の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。

終

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部 閨秀小説號」博文館

1895（明治28）年12月10日

初出：「文藝俱樂部 閨秀小説號」博文館

1895（明治28）年12月10日

※初出時の署名は、「一葉女史」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「決」と「決」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十三夜

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>